

1. 「先住民」の日本、発見

ウィリアム E. グリフィスが東京開成学校の教師を辞めて帰国した三年後の明治十年、この学校の後身である東京大学がひとりの米国人学者に初代生物学教授就任を依頼します。彼の名はエドワード・シルベスター・モース。研究対象の動物（腕足類）が豊富に生息すると聞いて来日し、東京大学に協力を要請したのがきっかけでした。

来日して三日後、横浜から東京に向かう汽車の車窓からの景観に、彼は大きな発見を確信します。アメリカで考古学者としての経験も積んでいた彼は、大森駅を過ぎてすぐ目にした線路脇の貝殻の堆積に、紛れもない貝塚の特徴を見出しました。発掘の実務を助けた彼の生徒二人のうちの一人名は、福井藩士佐々木権六の息子忠次郎。権六は福井滞在中のグリフィスを親身になって支え、忠次郎は藩校明新館でグリフィスに基礎化学を学びましたが、廃藩に伴い親子は東京に移っていました。

モースの学術報告には、「この第一冊に図示した材料を収集したのは、主として佐々木君と故松浦（佐用彦）君とである」と記されています。東大生物学科最初の卒業生のひとりとなり、日本の近代昆虫学の草分けとなった忠次郎は生涯モースを慕い、師の歿後大森村に記念碑を建てたため尽力しました。

モースの報告は外国人の間で大きな議論を引き起こしました。彼らにとって当時の日本は謎の国でした。同時に、体制を大きく変換し、他国には見られない勢いで西洋化・近代化を進める驚きの国でもありました。この特異な民族のルーツを考える上で、実証的な研究の素材となる古人骨と生活遺物がはじめて学術的に提供されたのです。

外国人たちは神武東征などの伝承から、日本人の祖先は国の南西、おそらく大陸から九州を経て列島東北へと進出し、古書に **Ebisu** として登場する先住民を征服したのだろうとイメージしていました。ですから彼らにとって格好の先住民候補は、列島の最北で当時「未開」とみなされる生活をしているアイヌでした。明らかに日本人および他のアジア人との外見上の差異が大きいこの狩猟の民に対して西洋人が寄せる関心には、ある親近感が伴っていました。

当時の日本人は髭面を忌避しましたが、毛深いアイヌの男たちの顔は総じて髭で覆われていました。グリフィスは著書で、「福井における自分は現地の子供達にとって、翼と牙をもたないドラゴンであった」と、異邦人に対する幼い好奇心の焦点が鼻の下の体毛にあった事を紹介しています。大森貝塚から出土したのもアイヌの人骨であると多くの外国人が想像する中で、しかし発掘の当事者の意見は全く異なっていました。

モースもアイヌを列島の先住民と考えましたが、自分が発掘したのは本州がアイヌの

島だった頃よりも更に古い時代の住人、いわば「プレ・アイヌ」の人骨だと判断しました。大森貝塚を特徴づけるのが多量で多様な土器であるのに対し、土器を作らず、作った歴史をうかがう事も当時はできなかった民族が、その遺跡を残した人々としてふさわしいとは考えられなかったのです。一方、すでに帰国していたグリフィスは大森発掘の前年に発表した著書 *The Mikado's Empire* (以下『皇国』) の中で、アイヌを日本の先住民として記述し、詳しく紹介しています。ただ、彼にとってアイヌと日本人との関係は、先住民と征服者という表現だけでは決して説明できない、より深く重要なものでした。

2. 明治四年に『古事記』が見える

グリフィスは滞日中、人々の容貌が社会の上層（貴族・武士）と下層（農民・労働者）とで際立って違う事に強く印象付けられました。現代では日本人の顔かたちにおける階層差は地域差などと共にもう消滅したと言えますが、かつては古墳の時代から明治に至るまで歴然と存在した事が古人骨の調査から判明しています。『皇国』第一部第二章“*The Aborigines*”において、グリフィスは挿絵付きで「貴婦人とその使用人」の容貌を対比しています。貴婦人を「細面の整った顔立ち」、使用人を「まるで平べったい顔」などと表現していますが、同時に彼はそれぞれを「ヤマト・南方型」「アイヌ・北方型」とも書いています。日本国民の大多数を占める人々のルーツが、ほとんどアイヌの血統と呼べると彼は確信していました。

彼は東京でアイヌと実際に会い、日本人の容貌との大きな差を知りながらその認識に至りました。英系米国人の彼は、アイヌと彼らの土地を征服した日本人との関係を「北米インディアンと米国白人の関係と同じ」だと書きますが、それはあくまで政治的関係であって「民族的にはサクソンとイングランド人の関係に当たる」、すなわちアイヌこそ日本人の先祖であると断言しています。この認識は社会階層に伴う容貌差から飛躍した想像の賜物ではなく、日本人に対する彼の別種の観察から導かれたものでした。まだ大森の人骨も知らず、自らも「我々はアイヌとその言語について何も知らない。敢えて何かを言うのは性急だ」と前置きしながら、それでもなお確信を持って日本人のルーツをなぜグリフィスは語る事ができたのか。この疑問のヒントとなるのが、第四章“日本の神話”です。

グリフィスは神話・伝承・伝説が大好きでした。生涯に日本だけでなく、アジア・ヨーロッパ各地のお話取材した作品を多く出版しています。彼は『皇国』第三章“史料について”の中で、『古事記』『日本書紀』の記述は「多くが伝説的で誇張され、とても文字通りには」取れず、「まともな歴史書とは呼べない」としながら、次の章では天地創造にはじまり、スサノヲの大蛇退治、天孫降臨に至る神話を記紀に依って興味津々に

綴ります。そのハイライトを成しているのが、アマテラスが天の岩戸に隠れる物語です。

太陽女神を岩窟の外に誘い出すための、神々の合議と準備作業。アマテラスの姿すなわち太陽に見まがうほど、円く大きな鏡の製造。女神を魅惑するアクセサリーの製作。企画の成否のト占。裸身に近い姿のアメノウズメノミコトを中心とした音楽の熱狂。グリフィスがこの場面を詳述したのには理由があります。「日の女神を引っ張り出す作業のうちには、管弦楽、舞踊、占い、装飾、織物、大工仕事の起源が見られる」。

日本滞在中のグリフィスは、ただ教育に熱心な学校の先生だったわけではありません。暇を見ては福井の、東京の町を歩き、郊外へ出向きました。越前では白山に登り、海に遊び、鉱山や和紙作りを見学しました。祭がある度に出向き、人々の様子に見入りました。「日本のアート、古代・現代の彼らの生活について学ぶ者にとって最も大きな喜びのひとつは、原初の文化の遺存を見出す時、あるいはその起源を神代にみる数千年前の儀礼・風習の痕跡を今日の慣習からたどる時だ。詩と神話の衣の下には、美しい真実が数多ある」。

彼は『皇国』で自分の発見を開陳します。「鍛冶の神が天の鉄鉦から作った鏡は、現代日本の美女がその前に正座し、腰まで裸になって何時間もかけておめかしする、磨き上げた円鏡のオリジナルである」。岩屋の前でウズメが見せたダンスは、「日本いたる所の村々町々の路上で見る芝居がかった舞踊の元になっている」。ウズメのたすき掛けも、神々が準備した御幣も、彼には家事をする現代女性の姿として、あるいは神社の徴として、おなじみの物でした。

「これら全ての遺物は、足早な旅行者や、ただ強欲のみを動機としてこの島に住む外国人にとっては、つまらない無意味なものだが、現地の人々と、知性ある外国人にとっては、古代の、神聖な、純真なる喜びの産物であり、特に後者にとっては、ある国民から受ける新鮮な驚きと楽しみの源泉であり、その人々の中で暮らすのは、強烈に面白いのだ」。グリフィスの日々の散策は、空間だけでなく、時間の旅でもあったのです。

彼が当時訪日した一般的外国人と違ったのは、古代人の姿を現代アイヌの姿から想うだけでなく、現代日本人の日々の生活の中にも見えていた事です。そんな彼の感性において、見聞したふたつの民族、日本人とアイヌの文化は容易にクロスオーバーしたのでした。「数々の印象的な実例からいって、日本人とアイヌの独特の観念、慣習、迷信は、ほとんど同じものである」。外形など、現代の日本人とアイヌとの大きな違いをもたらしたのは、「外国人の血の流入とか、毎日の入浴の長期的影響とか、暖かい気候とか、チャイナ文明とか、狩りをやめて農民になった事とか」、つまり歴史、時間によって説明できると、日本通史『皇国』の著者は考えました。アイヌだった頃の外形の遺存が、明治庶民の顔かたちというわけです。

3. 彼らが愛した、十九世紀の日本

E. S. モースもまた、日本人の生活文化に魅せられた人でした。そのハマりぶりはグリフィス以上でした。初めて日本人の住まいを海外に本格的に紹介する本を著し、膨大な民俗資料をアメリカに持ち帰りました。特に陶器を蒐集し、第一級の鑑定家となりました。博物館に寄贈したコレクションは今日大変貴重です。晩年上梓した大冊 *Japan Day by Day* は、明治日本見聞記として非常に高い価値があります。グリフィスも帰国後、著作と講演で日本を紹介し続けましたが、訪日前の予定通り牧師の役目も全うしました。モースは高名な動物学者として来日し貢献しながら、帰国した後はすっかり日本を紹介する仕事の方がライフワークになりました。

しかしモースの日本文化を見る目は科学者の物であり、だからこそ大きな貢献が可能でした。発掘した遺物や蒐集した陶器の扱い方、系統的に整理し分類し考察する手法と哲学は、動物学者として培われたものでした。ただ順序で言えば、少年時代に貝を探し集めた頃からのコレクターの本性が彼を博物学者にし、日本がその研究対象になったと言えそうです。

モースは宗教・祭祀や説話には無関心でした。外国人として最も現代日本人の生活に精通する彼が、そこに古代の痕跡を見る理由はありませんでした。古代の情報ならば発掘される事物としてありました。ですが彼が愛したのは、すでに数千年前に失われた見知らぬ人々の文化ではなく、彼を実生活において虜にしつつ、また失われつつあった同時代日本の美しい文化でした。

グリフィスはその失われゆく文化と共に、変わり行く日本の姿もまた愛していました。彼が見た同時代日本人のあり様は、彼に古代を想起させると同時に、輝かしい近代を予示するものでもありました。「日本人の持つほとんど全ての物が、チャイナやコリアやタタールに起源する物ではなく、アイヌから受け継いだ物」という『皇国』の記述。ここからは、なぜ日本人は大陸アジアの隣人たちとこんなにも違うのかというモースも抱いた感覚、そしてなぜ日本人だけが自ら積極的近代化に乗り出したのかという、彼の研究心の根本にあるものから「日本人＝アイヌ」説が必然的に導かれた因果が察せられるのです。

現在と未来を知るために彼が探求した過去の日本、その結晶として彼が残した通史『皇国』の内容を、当館では今後も『グリフィス日本史』としてご紹介していきたいと考えております。

※文中 “*Shell Mounds of Omori*”、*Japan Day by Day*からの引用は、それぞれ岩波文庫『大森貝塚』1983、講談社学術文庫『日本その日その日』2013によりました。